

## 泉州地域の観光資源の活用について

中 尾 清

### 1 はじめに—研究の背景と目的—

#### (1) 大阪観光の動向

大阪市は、関西国際空港（以下、「関空」という。）開港前の1993（平成5）年度に、初めて本格的な「大阪市の観光動向調査」を行った。

大阪市では、その結果を踏まえ、都市型観光や「ビジター」に着目した「大阪市観光基本施策」を策定し、その後、関空の開港（1994年）、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの開業、ベイエリアの観光開発など民間活力による都市型観光施設を背景として、「国際集客都市づくり」に力を入れてきた。

関西における“ヒト・モノの交流”の増大の期待を担っている関空は、2期島も供用開始されて、特に重要な役割を果たしてきているが、近年の不況が追い打ちをかけて、航空機の乗降客数も伸び悩み、関西圏・大阪府・大阪市における観光客動向にも厳しい状況が出てきている。

最近の明るい材料としては、2010年7月1日より、中国人の個人旅行のビザ発給の規制が緩和され、関空から入国する中国人観光客が増えてきていることである。また、格安航空会社の国際便で来日する韓国人観光客も円高にも係わらず、増加しているように見受けられる<sup>1)</sup>。しかし、そのほとんどの観光客は、泉州地域（以下、「泉州」という。）を素通りして、大阪市内、京都、富士箱根、東京（買物）、成田（空港）から帰国するという。また、逆のコースである成田、東京、富士箱根、京都、大阪市内（買物）、関空から出国するというのが実態で、泉州地域は、素通りされているのが実態である。ホテルには、帰国前の中国人、韓国人観光客等の宿泊客があるが、「アジアレート」で、しかも素泊まりが多いといわれている。そして、近隣のコンビニや大型スーパーマーケットでの買物にほぼ限定され、まだまだ地域が潤うという状況ではない。

#### (2) 大阪府・観光客数の推計

1998年以降の「大阪府・観光客数の推計」（大阪府調査）から傾向を見てみると、大阪府全体では、緩やかではあるが右肩あがり推移していることがうかがえる。泉州も、大阪府全体と傾向を同じくしているが、依然として、約10%の域を脱していないのが現状である。

#### (3) 本稿の目的

筆者は、かつて『大阪明浄大学紀要第4号』（2004年3月発行）で『泉州観光の現状と課題』を論じたが、本稿では、この間約7年間、堺市の指定都市昇格や、国の観光立国政策の追い風の中で、泉州地域の市・町の観光を巡る状況はどう変わったのかを踏まえて、『泉州観光の現状と課題』を再構成し、現時点で検証し、今後の方向性を見出すことを目的とする。

表1 大阪府・観光客数の推計

(万人)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2009年度
北大阪	1,203	1,313	1,374	1,447	1,479	1,403	1,426	1,441	1,438	1,397	1,340
東部大阪	653	790	752	758	753	693	597	628	568	602	632
南河内	283	398	338	380	365	345	387	384	404	393	431
泉州	1,067	1,132	1,176	1,279	1,415	1,517	1,453	1,453	1,495	1,539	1,529
大阪市	9,588	9,698	9,783	10,118	9,740	10,097	10,080	10,089	10,405	10,435	10,430
大阪府計	12,794	13,331	13,423	13,982	13,752	14,055	13,943	13,995	14,310	14,365	14,362
(府外)	5,820	5,972	6,049	6,379	6,152	6,094	6,096	6,098	6,315	6,330	6,318
(府民)	6,974	7,359	7,374	7,603	7,600	7,961	7,847	7,897	7,995	8,036	8,044

資料：大阪府商工労働部観光交流課『大阪府観光統計調査成果報告書』（各年度版）より作成。

(注) 北大阪とは、吹田市・高槻市・茨木市・摂津市・島本町・豊中市・池田市・箕面市・豊能町・能勢町の地域をさす。

東部大阪とは、守口市・枚方市・寝屋川市・大東市・門真市・四条畷市・交野市・八尾市・柏原市・東大阪市の地域をさす。

南河内とは、富田林市・河内長野市・松原市・羽曳野市・藤井寺市・大阪狭山市・太子町・河南町・千早赤阪村の地域をさす。

泉州とは、堺市・泉大津市・和泉市・高石市・忠岡町・岸和田市・貝塚市・泉佐野市・泉南市・阪南市・熊取町・田尻町・岬町の地域をさす。

## 2 泉州観光の現状

### (1) 泉州とは

泉州とは、大阪府の南部に位置し、指定都市・堺市以南9市4町を指す。合計面積は、約570 km<sup>2</sup>である。人口の合計は、堺市の約83万人を含めて約170万人である。東に、金剛・葛城・紀泉の山地、西と北は大阪湾に面し、田園地帯にも恵まれた気候温暖な土地である。大阪湾の対岸で泉州と良く似た風光の神戸市1市と比べると、面積では、神戸市が約550 km<sup>2</sup>、人口では、神戸市が約153万人で、泉州とほぼ同じである。

### (2) 泉州の観光資源と活用状況

泉州の観光資源は、大阪市や神戸市に比べると「質・量」ともに低いと言わざるを得ない。この状況は、変わっていない。そこで、代表的な泉州の観光資源をとり上げ順不同に特徴・特色・課題・問題点などを追加・補正し、指摘すると、次のとおりである。

表2 泉州の観光資源と活用状況

観光資源	活用状況（特徴・特色・課題・問題点など）
①関西国際空港	近年の不況によって、航空機の乗降客数や関西圏・大阪府・大阪市における観光客動向にも厳しい状況が出てきているが、伊丹空港との一体的な管理や神戸空港との連携など方向性が見出されつつある。
②「大山古墳（仁徳陵）」などの百舌鳥古墳群	あまり活用出来ていないが、2010年6月、世界遺産・暫定リストに仁徳天皇陵などを含む「百舌鳥・古市古墳群」が追加された。
③岸和田のだんじり祭	全国区。近年とみに活発になってきている。毎年、2日間で約60万人の観客がある。やり廻しや宮入は圧巻である。

④泉州・山手地区 (岸和田山手・熊取・泉 佐野など)のだんじり祭	魅力的だが、知名度が低い。近年とみに活発になってきているが、地元 の祭の色彩が強い。やり廻しや宮入は圧巻である。特に熊取・大森神社の 宮入は見応えがある。
⑤泉南(泉南・阪南・岬) の地車(やぐら)	魅力的だが、知名度が低い。地車(やぐら)は、だんじりに比べて小振 りで、しかも車輪が2つなので、小回りが利く。波多神社の宮入は見応 えがある。
⑥貝塚(感田神社)の太鼓 台	魅力的だが、知名度が低い。太鼓台は、かなり重量がある。「練り合わ せ」では、担ぎ手はかなり体力を消耗しているが、観客側から観ると見応 えがある。
⑦犬鳴山(修験道)	全国区。「心」の時代になり、参拝者とハイキング客はそれなりに多い が、“修験道”体験など、観光に活かされていない。また、犬鳴山温泉郷 との連携が課題である。
⑧犬鳴山温泉	大阪で唯一の温泉郷。秘湯の雰囲気が漂うが、温泉郷としては、規模が 小さい。競争があまりない。
⑨牛滝温泉・森(いよやか) の郷	周辺は、秘湯の雰囲気が漂うが、温泉館や河川改修の跡の景観が異質な 感じがする。空海も修行したという大威徳寺の境内と周辺は森と川と滝が あり、森林浴に最適の場所である。一軒宿の温泉なので、競争があまりな い。
⑩ほの字の里	ほの字の里は、元蕎原小学校の跡地利用により設置された施設で、温 泉、宿泊施設、木工などの体験施設、体育館、運動場などがあり、市民に 人気がある。温泉施設が少し狭い。
⑪奥水間温泉	奥水間温泉は川の端にあり、周辺は、秘湯の雰囲気が漂う。一軒宿の温 泉なので、競争があまりない。
⑫葛城山のブナ林	貴重なブナ林である。葛城山は大阪と大阪湾が一望出来る展望スポッ トである。
⑬行基関連(家原寺・土塔 ・久米田池・久米田寺な ど)	知られていない。行基は、渡来系の子孫で、周りに技術系集団が存在し ていて、行基と共にため池を造成したり、橋を架けたり、温泉を開発する など貢献した。堺市にある家原寺(生誕地)や土塔は一見の価値がある。
⑭堺市北旅籠町付近(鉄砲 鍛冶屋敷など)	貴重な資源であるが、私有財産のため非公開である。
⑮堺市ハーベストの丘	宣伝不足は否めない。集客の工夫がいる。
⑯岸和田城・本町界隈	岸和田城は、再建から半世紀を越えて街並みに存在感が出てきた。桜の ころは、城が桜に映えて美しい。 本町界隈は、町並み保存が行き届いており、江戸から明治の雰囲気が残 っている。
⑰貝塚・寺内町(願泉寺)	寺内町の町並みの景観は、建替え等で“黄信号”がついているが、近 年は有形登録文化財の指定建造物が増えており、街並み保存の意気込みが 感じられる。願泉寺の補修工事の完了が待たれる。
⑱佐野町場	佐野町場には、昭和期の町並みが残っており、中高年齢者には、郷愁を 感じさせる。
⑲信達宿	信達宿では、梶本家の“ふじ祭”が地元の協力の元で、開催されてい る。沿道の住宅の建替え時には、景観に配慮しているように見かける。
⑳山田家住宅	江戸期の庄屋屋敷・山田家住宅では、山田家保存活用協議会を結成し て、建物の公開やイベントを開催している。
㉑中家住宅・煉瓦館	江戸期の庄屋屋敷(中家住宅)は、熊取町が公開・活用しており、観光 資源としても貴重な存在である。・煉瓦館(旧中林綿布工場跡)は住民交 流センター(生涯学習施設)として活用されている。
㉒日根神社・慈眼院・大井 関	観光エリアとしてまとまっている。桜のシーズンは、賑わっている。慈 眼院の多宝塔(国宝)が公開されていないのが残念である。
㉓田園地帯を活用したグリ ーンツーリズム	貝塚市農業庭園・たわわ、泉南市農業公園が供用されている。たわわは 農事組合法人が頑張っている。農業を巡る状況は、厳しいが、休耕田、農 地転用、耕作放棄地などを活用したグリーンツーリズムの実践が必要であ る。

②4 田尻漁港・岬町海釣り公園	田尻漁港朝市は、風情があり賑わっている。岬町海釣り公園は、閑空の造成に使用する土取り棧橋の跡地利用として開設された。周辺は大阪府内の唯一の自然海岸が残る風光明媚なところである。魚もよく釣れるとの定評がある。
②5 特産品「泉州ブランド」	全国区。泉州玉葱、水なす、和泉ぐし、堺の刃物、泉州の地酒。的確なマーケティングが必要である。

### 3 泉州観光の課題

表1・2を見ると、泉州地域には、魅力あふれる観光資源がたくさんあるにも係わらず、「泉州地域の観光客数が決して多い」とはいい難い。なぜ少ないのか。それでは、どこに課題があるのか。泉州観光のウォッチャーとして、観光行政に力を入れている神戸市と対比して検討してみると、次のような課題が浮かび上がってくる。

神戸と泉州の人口、面積、風光は、ほぼ似ているが、神戸の「1市」に対して泉州は「9市4町」である。泉佐野市・泉南市・阪南市・田尻町・岬町の合併は御破算になり、依然として泉州にこのような多くの地方公共団体が存在するという現実には、解消していない。当然、各々の行政の取り組みに大きな差が出てくるのは明白である。特に観光行政に限って指摘すると、次のとおりである。

神戸市は、1市であるので、観光行政に「メリハリ」がある。しかも、集中的に人材を配置し、観光開発、観光宣伝等に力を集中させることができる。その結果、「観光都市神戸」として一般に認識されている。

ところが、泉州地域では、各市町で独自の観光行政を展開しているため、「観光地」はあるものの「観光都市」としては、一般に認識されているとはいいい難い。すなわち、「ヒト・モノ・カネ・情報」などの質・量ともに、不利は免れない。指定都市・堺市や岸和田城を擁し、だんじりで知名度の高い岸和田市の泉州観光振興に対するイニシアティブが望まれる。

#### (1) 観光を支える人材と観光行政ノウハウ

各市町の人材が少ないので、観光行政に職員を配置しにくく、「観光担当者が1人や他の業務とかけ持ち」のところもある。組織が分散化している。人事異動で職員がすぐ代わるため、観光専門家が育ちにくい。観光協会の事務局を行政が兼務している。公立の観光施設の経営感覚は乏しいが、指定管理者制度の導入により改善されてきている。観光予算・財源が乏しい。観光客のニーズをつかめていない（観光マーケティングができていない）。観光宣伝が足りない。

#### (2) 観光資源

表2で掲げたように観光資源はそれなりにあるが、規模が小さい。観光資源が点在・分散化している。同じような“ハコモノ”が多いため、文化施設が競合している。交通が不便であり、宿泊施設が少なく、しかも堺市と泉佐野市に集中している。そして、土産物・名産品が少ない。

### (3) 観光産業

- ①観光産業は、零細・中小企業が圧倒的である。
- ②観光産業は、薄利多売であるが、不況で売れない。
- ③観光産業の魅力が感じられないので、新規参入が見られない。

### (4) 関西国際空港

大阪観光の“エース”として期待され、重要な役割を果たしてきている関西国際空港が、近年の不況（オイルの高騰など）によって、航空機の便数・乗降客数も伸び悩んでいる。格安航空会社の航空機の運航を中心にアジアからのさらなる集客が望まれる。

### (5) 住民の意識

泉州は、気候温暖、風光明媚な土地柄である。住民は、大都市である大阪市、堺市に近接していて、雇用に困らなかった。かつては、地場産業としての紡績業が隆盛したこと、そして、“ガチャ万”という言葉を生んだ。また、泉州“タマネギ”に代表されたように豊かな農業地帯であった。“茅渚の海”の豊かな水産資源があった。等々。

このような理由で、地域経済は、「泉州の域内で完結し、生活にあまり困らず、現金収入は近接する大都市から得ることが出来た」という構図から、観光収入を得ようということなどは、あまり考えたこともなかったのではないかと推察される。この傾向は、変わっていない。

## 4 泉州観光の推進体制

### (1) 「紀泉わいわい村」とグリーンツーリズムの展開

大阪府は、金剛生駒紀泉国定公園の山の中（泉南市）に紀泉わいわい村（建設中は“紀泉ふれあい自然塾”と言っていた。）を、総事業費18億2300万円で建設した。山と森林に囲まれ、集落の中を川が流れ、何か“一昔前の日本の田舎の佇まい”を彷彿とさせる。紀泉わいわい村は、山間の約4haの敷地に、生活体験施設（農家）6棟、管理・研修棟、キャンプ場、田んぼや畑（生産体験施設）、自然観察コースなどが整備されている。宿泊ができる生活体験施設などは、昭和20年代の泉南の農家を忠実に再現している。土間や板の間、囲炉裏、かまど、五衛門風呂もある。

近年グリーンツーリズムが注目されている。グリーンツーリズムは、「都市の住民が自然や景観を求めて農山村や漁村へ出かけ、今までの“見る観光”から一歩踏み込んだ、“する観光”、すなわち、そこでの生活体験や地域住民との交流を通じて、観光欲求（“楽しみ”や“喜び”、“やすらぎと感動”）を満たす観光行動」である。

都市住民が“紀泉わいわい村”で“里山体験”に挑戦し、来るべき農山村での生活体験や地域住民との交流に備えて、予行演習をすることができる。まさに、“グリーンツーリズム入門塾”となる<sup>2</sup>。

### (2) 広域連携の展開

泉州の観光魅力を高めるためには、泉州地域が“合併”して、大阪市や神戸市に匹敵する力

を発揮することが必要であろう。現実には、各市町村の住民の意識や財政力、歴史・文化の違いなど、“合併”の必要性は叫ばれるが、なかなか難しい。しかし、観光振興については、お互いに連携をとることに大きな障害はない。広域連携して観光振興をするということは、「三本の矢」にも相通じるものである。観光資源の魅力を高めるためには、「点と点を結んで線にする」。「線と線をつないで面にする」。このように「面的な展開をしないと観光都市間競争には勝てない」という考え方が必要である。

そこで、泉州で取り組まれている広域観光連携の現状と課題を概観してみよう<sup>3</sup>。

#### 1) 「華やいで大阪・南泉州観光キャンペーン推進協議会」の活動

大阪府内の広域観光振興団体としては、「華やいで大阪・南河内観光キャンペーン協議会」(河内長野市などで構成)、「豊能地区広域観光推進協議会」(池田市などで構成)などが活動している。南泉州では、「華やいで大阪・南泉州観光キャンペーン推進協議会」(岸和田市などで構成。以下、「南泉州推進協」という。)が活動している。

南泉州推進協は、1991年に結成され、構成団体は、岸和田市、貝塚市、泉佐野市、泉南市、阪南市、熊取町、田尻町、岬町などである。

年度ごとに幹事を持ち回りで担当して、観光マップやガイドブックの作成、ツアーエクスポへの出展等の活動をしているが、この程度に止まっている。マンパワー不足が課題である<sup>4</sup>。

#### 2) 「根来街道グリーンツーリズム推進連絡会」の活動

2002年に結成され、構成団体は、大阪府・泉南市・和歌山県・岩出市・根来寺・南海電鉄である。泉南市と岩出町と結ぶ根来街道の沿線には、泉南市農業公園、金熊寺(梅の名所)、紀泉ふれあい自然塾、根来寺、根来げんきの森、和歌山県植物公園緑化センターなどが点在している。また、2003年春、この街道沿いに「道の駅」(桜の里)が整備された。これらを活用して、府県を越えて広域で連携して、グリーンツーリズムを振興しようとするものであるが、大阪府、和歌山県、泉南市、岩出市から拠出された予算しかなく、活動も紀泉山脈横断ハイキング、観光マップの発行、協議会メンバーの研修、情報交換程度に止まっている。財源と事務局体制の強化が課題である<sup>5</sup>。

#### 3) 南泉州観光ボランティア連絡協議会の結成と活動

2010年3月、岸和田市以南の観光ボランティアガイド協会等(5市3町、岸和田は、遅れて加入。)が大阪観光大学に集まり、南泉州観光ボランティア連絡協議会<sup>6</sup>を結成し、活動を開始した。

当面は、各団体の情報交換と相互学習、イベント参加などで、交流を図り、新たな観光振興事業を5市3町の行政等とも連携しながら活動することになっている。

### 5 これからの泉州地域観光行政のあり方<sup>7</sup>

#### (1) 泉州地域の「個性＝独自性」の発揮

泉州地域も堺市・岸和田市を始め各市町で観光振興を市政・町政の重要な柱の一つとして掲げて推進している。しかし、「ヒト・モノ・カネ・情報・観光資源」の面では、大阪市、京都市、神戸市などには及ばない。したがって、泉州地域にとっては、さらなる知恵を出しあって、その地域の「個性＝独自性」を確立し、次のような観光振興に取り組む必要がある。

① 宮内庁が管理している百舌鳥古墳群の多くは、「天皇陵」ということで、公開は非常に困

難であるが、「陵墓」は、正に日本の「国の光」である。できれば科学的な調査をして、神戸市の「五色塚古墳」のように復元し、エジプトのピラミットのように、国の内外に「観（示）す」ことができないものか。世界遺産・暫定リストに仁徳天皇陵などを含む「百舌鳥・古市古墳群」が追加されたので、積極的に推進していくことが肝要である。

② 全身を滝水に打たれ、ひたすら念仏を唱えている姿は、感動的でもある。犬鳴山は、女性も受け入れてくれる修験道の道場である。今は「心」の時代である。「癒し」の場として、犬鳴山（修験道）の活用は有効であろう。もとより信教は自由であるが…。

③ 泉州には、犬鳴山温泉郷、牛滝温泉・森（いよやか）の郷、ほの字の里、奥水間温泉などがあるが、規模が小さい。温泉は心身ともにリラックスさせてくれ、健康保持のためにも必要不可欠である。さらに、新たな温泉地の開発や「温泉療法」「食事療法」「運動療法」などのプログラムを開発して、既存温泉魅力度を高めていく必要がある。

④ 展望が非常に良い葛城山のブナ林は、貴重な存在であり、積極的に保全活用することが望まれる。和歌山県側との一体的な管理も積極的に推進する必要がある。

⑤ 岸和田城、岸和田市本町、堺市北旅籠町付近（鉄砲鍛冶屋敷など）、貝塚市寺内町（願泉寺）、その他市町の紀州街道沿い・熊野古道沿いに残っている古い町並みなどは、泉州の貴重な、かけがえのない財産である。ぜひ、所有者の理解の下で、できれば、伝統的建造物群保存地区指定、文化財指定など指定を受け、行政の支援を得て、地区ぐるみで保存してもらいたい。

⑥ 紀州街道沿いの岸和田市本町では、地域の住民が自主的に古い町並みを保存・公開し、ボランティアで、町並みの案内や建造物の説明をしているが、この輪を泉州地域一帯にもっと広げることが肝要である。

⑦ 池上曾根史跡公園、弥生文化博物館、久保惣記念美術館、ハーベストの丘など非常に良質の観光資源が存在するが、“知名度”が低い。もっと宣伝すべきである。

## (2) 歴史や文化に根ざしたイベントの展開

「カネ」で買えないものの一つに、その地の歴史や文化がある。真似はできるが、本物になるには、「ヒト・モノ・カネ・情報」と長い「時間」がかかる。

泉州地域には、前で指摘したような歴史や文化に根ざしたイベントが存在している。すなわち、岸和田のだんじり、泉州・山手地区のだんじり、貝塚・太鼓台（感田神社）、泉南・地車（やぐら）など、近年とみに活発になってきているが、岸和田のだんじりのように、観光をもっと意識して、全国に発信していても良いのではないか。

## (3) 観光資源の開発

泉州地域における観光資源の開発は、まだ、途上にあると言えよう。貝塚市の農業庭園・たわわは完成し、熊取町の「旧中林綿布工場跡」は「煉瓦館」（住民交流センター）として再生され、利用されている。泉佐野市「旧コスモポリス計画地」（通称：コスモ山）における大阪府の自然公園計画は魅力的な計画ではあるが、実現までには、まだ時間がかかる。りんくうタウンには、構造改革特区として、観光施設（カジノ？）などの設置が論議されてきたが、まだ、見えてこない。

#### (4) 観光資源の維持管理・リニューアル・再生・活用

泉州地域に現在ある観光資源については、大切に維持管理・リニューアル・再生し、活用していくことが肝要である。また、玉葱、水なす、和泉ぐし、堺の刃物、地酒など、泉州の特産品は、「泉州ブランド」として、的確なマーケティングの下に全国へ売り込んでいく必要がある。

### 6 おわりに——ボランティアと行政の協働が“車の両輪”——

#### (1) 観光行政組織の充実

泉州では、観光を担当する主管課も設置していない自治体がある。是非「観光課」を、それが無理な場合は、「観光係」を設置してもらいたい。また、「観光協会」も全自治体に設置してもらいたい。

泉州などは、指定都市である堺市を中心とした連携が可能な泉北地域を除いて、まとまりのある南泉州の「5市3町」で、協議会ではなく、観光行政を担当する一部事務組合「南泉州観光局」を設立し、一体となって観光振興を図っていくべきである。現況は、あまりにも観光行政の力が分散されている。また、それに対応して各市町の観光協会の連絡調整をする「南泉州観光連絡協議会」を設けてはどうか。

そして、「南泉州観光局」は、“広義の観光行政”を展開するため、政策立案を中心に活動し、観光施設の管理や観光宣伝などは、「南泉州観光連絡協議会」や各市町の観光協会、南泉州観光ボランティアガイド連絡協議会の担当とし、役割分担をすることが肝要である<sup>8</sup>。

#### (2) 行政の観光担当人材の育成

「職員が3年ぐらいで代わってしまっていて困る」と、市民からいわれることがある。事実そのとおりであろう。ところで、“狭義の観光行政”は、観光案内から観光宣伝、観光計画、観光統計、観光施設の管理・運営、庁内・民間企業・民間非営利団体などとの連絡調整などまで、多岐にわたっている。3年ぐらいでは、観光を熟知し、観光政策を立案するノウハウを蓄積して、「さあ、今から」というときに異動することになってしまうので、観光のエキスパートは育たない。泉州は、関西国際空港のお膝元で、「観光立国・大阪」の実現をめざす“リードオフマン”の役割を担っている。その観光行政の最前線の職員として、どうしても観光のエキスパートの力が必要である。そのためには、観光に適材の職員を見だし、キャリア・パスの一環として、観光主管課に「出たり入ったりさせて」幅広い行政経験を積ませることが肝要である<sup>9</sup>。

#### (3) 市民の観光ボランティアの育成と民間の智慧の活用

筆者は、長年にわたり泉州地域の観光振興のために審議会・委員会の委員に就任したり、グリーンツーリズムの実践、講演、助言、観光振興計画・総合計画の策定などに係わってきたが、前述した1) 2) のとおり、広域にわたる観光行政には、限界を感じてきた。観光施設等を行政が直接管理するのではなく、指定管理者制度による民間活力の導入を推進していく必要性も感じてきた。

大阪観光大学に教員として赴任後10年になる。この間、各地の観光まちづくりの応援をし



てきたが、残念ながら泉州観光の活性化は、遅々として進んでいない、といわざるを得ない。ただ、観光ボランティアガイドの養成だけは、貝塚市観光ボランティア養成講座を手始めに、泉南市、泉佐野市の講座を支援してきた。さらに「観光まちづくり」「観光ボランティアの役割」「ホスピタリティ」などのテーマで、熊取町、岬町、神戸市垂水区、河内長野市、明日香村などでも講演してきた<sup>10</sup>。その結果、2010年3月に、南泉州観光ボランティア連絡協議会の設立という成果をあげることができた<sup>11</sup>。

#### (4) 観光まちづくりの本質と観光ボランティアへの期待

『論語』の中に、「葉公問政。子曰、近者説、遠者来。」<sup>12</sup>と、ある。これは、政治の要道を孔子に質問したものである。この言葉を「観光まちづくり」に置き換えてみると、全くその本質を突いている。泉州地域の観光資源の活用についてもこの言葉の精神で実践していけば、泉州観光の振興策になりうる、と確信できる。

観光行動は、行政区画を越えて行われる。南泉州観光ボランティア連絡協議会に参加する岸和田市以南の5市3町の観光ボランティアガイド協会等のメンバーは、「観光案内をすることに「喜び・楽しみ・生きがい」を感じて、日々、「住んでよし」(いつまでも住み続けたい)、「訪れてよし」(何度でも訪れたい)のまちづくりの実践をしている。

ボランティアは、“金がない”(当たり前)。行政は、“人(マンパワー)がない”(もっとも“金もない”が……)。近年観光ボランティアガイドの活躍は著しいものがある。ボランティア(南泉州観光ボランティア連絡協議会)と行政(仮称「南泉州観光局」「南泉州観光連絡協議会」)。この両輪が協働で観光振興とか地域の活性化を進めていくことが観光立国の基本である。

#### 注

- 1 南海泉佐野駅周辺やJR日根野駅前ホテルの宿泊者の状況のヒヤリング、観察からもこの傾向が見られる。
- 2 中尾清(2004)「泉州観光の現状と課題」『大阪明浄大学紀要』(No.4、大阪明浄大学)99頁。
- 3 前掲書、99頁。
- 4 前掲書、99頁。
- 5 同上。
- 6 『ニュースせんなん』(2010年4月10日)
- 7 前掲書、100-101頁。
- 8 前掲書、102頁。
- 9 同上。
- 10 参考までに2010年10~12月に実施された「第6回泉佐野観光ボランティア養成講座」の実施要項を《参考2》として掲げる。
- 11 諸橋轍次「子路第十三」『論語の講義(新装版)』大修館書店、2007年、299頁。

《参考1》第6回「泉佐野観光ボランティア養成講座」実施要項

1 目的と対象

泉佐野市在住、在勤の方を対象に、本市を訪れる観光客に、ホスピタリティ精神（もてなしの心）をもって市内を案内できる知識と技能を習得してもらい、観光案内活動に協力して頂くことを目的に、「泉佐野観光ボランティア養成講座」を全日程参加できる方を対象に実施します。

2 内容

泉佐野の歴史や文化講演、歴史館いずみさの等の見学、市内・他市フィールドワーク

3 主催：泉佐野観光ボランティア協会

共催：泉佐野市観光協会

後援：泉佐野市

泉佐野観光ボランティア養成講座 予定表

	月日	時間・場所	内容・テーマ	講師等
①	10.21 (木)	13:00～16:00 大阪観光大学 大学棟6階	・開講式 ・観光まちづくりとボランティアの役割	本協会会長 吉野 勝 大阪観光大学教授 本協会顧問 中尾 清
②	10.29 (金)	13:00～16:00 歴史館いずみさの地下研修室	・日根野とさの町場の文化財について	歴史館いずみさの館長 森 昌俊
③	11.5 (金)	13:00～16:00 泉佐野市役所 201会議室	・泉佐野市の観光行政について ・会員の体験談	泉佐野市観光協会 事務局長 池田秀明 本協会 会員
④	11.12 (金)	13:00～16:30 他市の見学	・フィールドワーク 泉南市	泉南案内人の会
⑤	11.19 (金)	13:00～16:30 さの町場	・フィールドワーク 泉佐野駅～さの町場散策～ 泉佐野駅	本協会 会員
⑥	11.26 (金)	13:00～17:00 犬鳴山・日根野	・フィールドワーク 泉佐野市役所～犬鳴山～日根神社～慈眼院～泉佐野市役所	本協会顧問 樋野修司 本協会 会員
⑦	12.4 (土)	13:00～15:30 泉佐野市役所 4階 庁議室 16:30～19:00	・当協会の活動内容について ・入会手続きなど ・修了証書授与 ・新旧合同懇親会（がんこ岸和田五風荘）	泉佐野観光ボランティア協会 会長 吉野 勝 新・旧会員全員

\*養成講座終了後、12月中頃に追加講座（社会教育課職員による講義とフィールドワーク）を予定しております。

《参考2》ニュースせんなん記事（2010. 04. 10）

[南版] 泉佐野市から岬町まで61,500部同日無料配布／次号発行予定：平成22年4月24日(土) 2010年(平成22年)4月10日(土)

# ニュースせんなん

平成22年4月10日(土) No.834 発行所 泉南文化センター 泉南文化センター http://www.rinku.or.jp/news-sf  
〒588-0016 泉佐野市高校西2丁目2415-1 TEL.072-489-6900 FAX.072-489-6901 E-mail news-sf@rinku.or.jp

近くにあった海辺のリゾート。

泉南文化センター 泉南文化センター 泉南文化センター  
TEL.072-489-1111

## 「観光」テーマに広域連携 岸和田以南のボランティア団体



シンポジウムで観光について語り合うボランティア団体の参加者  
(左端は中尾清大阪観光大学教授)

岸和田市以南で活動するボランティア団体が、「観光」を柱に、「南泉州観光ボランティア連絡協議会」を立ち上げた。こうした団体が広域連携するのは全国的にも珍しい。泉州地域には世界の玄関口「関西国際空港」があることから、国内だけでなく海外からの観光客誘致にもほずみがつくと期待される。結成式は3月20日、大阪観光大学で行われた。

この協議会は、岸和田市以南の市8町で独自の歴史遺産、伝統行事を自ら活動してきた民間のボランティア団体が、広域的な観光振興を担う力を合わせるもの。

各市町にある自然や歴史遺産、伝統行事を、はじめとした地域の魅力を、ボランティアグループ、ボランティアグループ活動や情報発信。さらに、関西国際空港に隣り立つ国内

外の観光客をも呼び込むというのが狙い。結成式には、岸和田市以東を主軸とするボランティア団体のほか、初年度の幹事団体（同協賛観光ボランティアアライアンス）が所在する同市の藤原雄男市長や各市町の観光行政の関係者なども参加。

加。初顔合わせのメンバーも多岐にわたる。名刺交換や活動内容を紹介するラウンジを回り、あうなで、交流をはかっていた。

この後に行われたシンポジウムでは、高取功氏（同協賛観光ボランティアアライアンス事務局長）、古野勝氏（泉佐野観光ボランティア協会会長）、松田秀徳氏（泉南管内人の会会長）の3名がパネリストとなり、これまでの活動経緯を語らへ、観光振興をテーマに議論した。同協議会では、大阪・奈良で行われている平城遷都1300年記念事業の歴史街道のリレーウォークに貢献するまで大規模な試みも無難しており、会合を担っていく。

協議会のサポーター役を務める大阪観光大学の中尾清教授によると、「観光」は、孔子が弟子らと政治や教育について述べた書物「論語」に出てくる部分「近者悦、遠者来」と同じことだそう。「政治で大切な法を樂公が孔子に質問した一部分ですが、『近くの人々が喜ばへば、それを遠くの人々が聞きつけてやってくる』という意味です。政治が観光に置き換えてみると、まさに観光の本質が現れてきます。仕入で良し、訪れて良し、持ち帰る、何れでも訪れなくならないまじつくりで観光振興を促したいですね」と中尾教授。